特116
994

爲政指南 上記 巻之

始

49116
994

烏城楮幣會々則

一、本會は烏城楮幣會と稱す

二、本會は古紙幣藩札物札及此れに附隨する諸般の研究者を以て組織す

三、本會役員は各會員の研究之を記載して年回発行す

四、本會員は年一回以上研究の結果を發表するの義務を有するものとす

五、本會は會員各自共立のものなれば役員を設けず責任は各自に於て負擔す

六、本會要員は年度の始に於て前項の事務を執行す

七、本會は會員の外楮幣中に関する本を買入れす

八、本會は年四回以上の研究をなさいるものは除外す

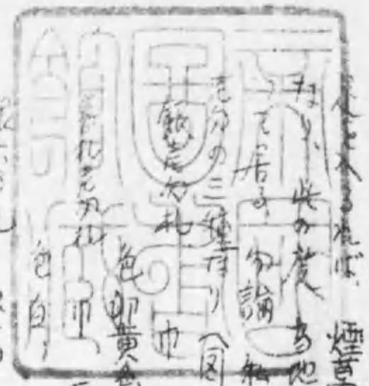
九、本會の事務所は岡山市下石井三丁目武田鉄二方に置く

以上

新發見 煙草店通用

備中之国 松山城下（現今の高梁町） 清き高梁川の流れに沿ふ一圓は現今でも備中葉と稱し 相當 良い煙草の葉を栽培して居る 此の山に四方を圍まる、山間の土地は昔より廣く煙草に就いての歴史を有し 編者の如き新參の者すら 此の地は一度 煙草に対する言の維き感にうたる、 程 此の地は煙草と緣いと深き 此の地に於ては 煙草代の發見の芽屋 煙草店通用も 此の地方の特産物を物語 今回發見のものは 銀壱匁と六分限りの二種と書れの

ふいじ 多け爻



極吟味 色薄色

印

紙質 楮 三寸五厘 紙質 楮 三寸五厘

一寸三分 長サ 五寸二分 厚サ 一厘

長サ 五寸 厚サ 一厘の色

上部に偏色つ染まり

上部 藍色の染まり

紙六分札 紙一匁札と同じ

紙二枚張合せ

紙二枚張合せ

査改芳綱仕入

藍色

藍色

大正
15. 6. 5
内交

以上は あるもの極少なく　　本全部 改め印と記す　　たゞ中の本目改芳綱仕入印
日書札に多く 銀札には少し。故に 煙草葉を買札し時目方を改め　記帳上書札
を後行せしものか。　銀札に於て見しものは 掛帳の印と共にある六分札を一枚見
しのみ。

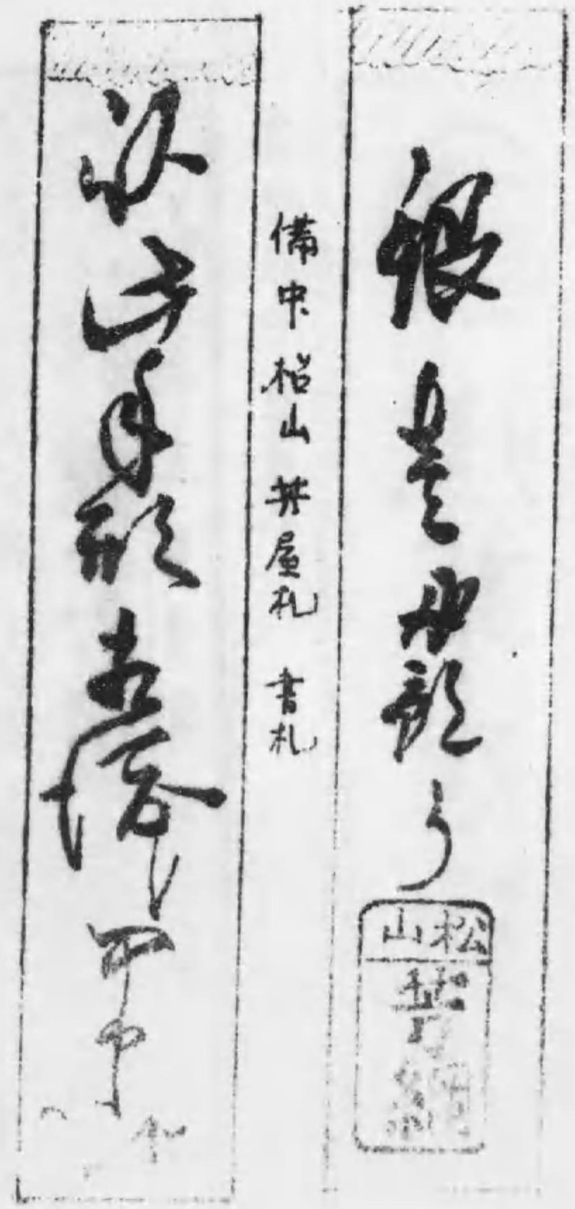
朱印　全体に表面の金額の処に押捺す。

此の印　全部裏表面に押捺せらるれども不鮮明なり。
時に表面にあり　ある時は上部にあり。
朱印
相廃か　廃業の時 押捺して廃札せし時の印か？

備中 芳綱 松山 藍色　概ね裏面に押捺せらる　何故か二個宛あり

朱印　表面 芳屋の処押捺せらる

以上



鑑運社之研究について

荒木華泉堂

編者が新進猛虎の勢ひにて　我が古札界に活躍して下さる事は同好諸君と共に、常に敬服して居る次第であるが今回更に岡山烏城楮帝誌上に鑑運社一冊の手替り研究を發表せられた、元来此の手替り研究は大坂の濱村半文錢を最初として古札界で淋しく二人ばかりであつた　姫路諸君や他古札家から何時も其の愚を笑はれて居たが今回同志の一人が出来て其の投稿を求められたから早速と拙稿を草する次第である、然し今では大阪の中島秋月君　丸岡の藤山代も共鳴研究せられつゝありて常に結んで居る

一度下間代が死去二ケ月程前に代の寓居で今後の古札界の有様を語り合つたが　同代は熱心にこの手替り研究の必要を小生に論ぜられたが　これが代の私に対する遺言の如くになつた　其の時丁度赤穂一匁札が代の二階にあつたので幅廣や丸印角印押掛印と色々二人で

研究し非常に面白かつた事を覺えて居る

余談は扨て置き主題の鑑連社の研究であるが　研究の必要上　鑑連社の歴史　種類の考證を發表せねばならぬが　此れについては武田氏初め他に投稿者もあるべく重復の恐れも有り、又武田氏の求めらるるは其の手替りなれば此處には略して手替りの研究のみ記載する以第である。

鑑連社第一期札

鑑連社は紀州と河内に区別するが此の他攝津に鑑連社なるものあつて小生は其の一匁を所有して居る　元来此の鑑連社は古きものでなく、其の札にも元治元年(高唱高唱高唱高唱)とあるから維新前である　の最初一期札は可成紙も厚く幅も廣く　裏面は南都でなく河内古市端山に兵衛丸印有るあるが此の札は可成り存在が少ない。

(紀州札は安政年間)

普通鑑連社札

武田君の前号誌に出た今　書かんとする札は紙も薄く幅も狭く、又存在も非常に多いものである然しこの種は一匁以下五分四分三分等あるが是れは略して壹匁の手替りに付て述べんか　まづ十二支がある

1　十二支札

元来此の十二支は年号を表したものでなく　イロハ別即ち組を表したものである即ち子の組戊の組等である

子　丑　寅　卯　○　巳　馬　○　○　酉　戌　○

大小の異る印あり(編者)

現在私の手元には辰・羊・さる・亥の四つが缺品である(編者も同様)御所持の御人は御分譲、給はりたし、欲したいかも知れぬ。昔はよく国字が亥之助であれば、亥の字を遠慮したこともある。この様なことが此の手替り研究の第一面白い処である。

2　假名文字

一匁には假名文字がある

[illegible]　等これは四十八字あつたものらしい

3　引替人の手替

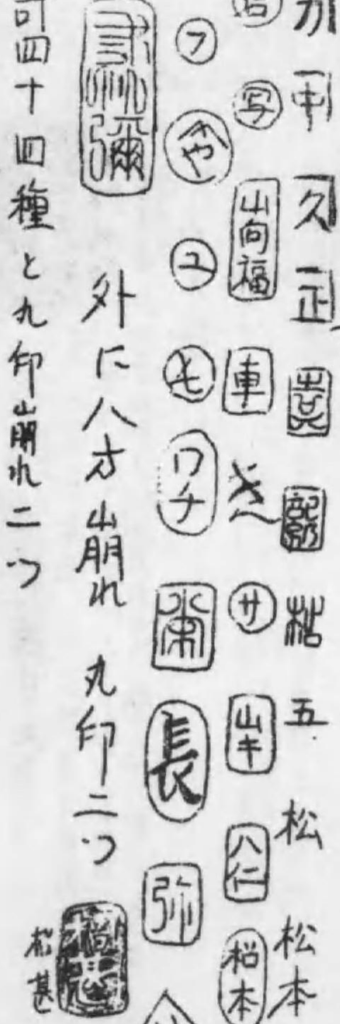
香久清は誰れの事か不明であるが、堺指吸請は、堺の指吸善兵衛であろう。この人は伊豫今治藩札の札請もやつて居る有名な人である

又堺で自分一人で札を發行して居る

中記号の分類

千の研究は取扱者の検印の知きものである。小生所持のものを記載せんか

A 黒印之部



梅(大小あり) 刃 中 久 正 五 松 松本 亀 幸

合計四十四種となる印山崩れ二つ 外に八方山崩れ 丸印二つ

B 朱印之部

三種

5. 刑木上の研究

A 押掛印

南都改の朱印は大中小の三種の手違りがある。中央部八方崩分銅形朱印 裏面長形印は讀む事が出来ない。又一匁文字上の丸印も同様である

5. 刑木の種類

大別して三種である

1 最初札 刑木乙より大なり。此の手形云々の文字の書き方相違あり

2 太字札 文字太し 裏面下部の六字中央の位置にあり

3 細字札 乙より引替所 裏面中央の玉の線も細し 南部以下の文字細字なり。尚ほ委しく説明せんか。寸法形状長し

之の太字札は御貸の字
之は 賃 ろは 賦
ろは貝の字の中央の二の字の上より 之は貝の字の上部より線が右に出づ
鑑蓮社札の研究は尚ほくわしく調査すべく 武田君より原稿催促あり脱したる事柄あり 他日又日を改めて記すべく 御叱正を乞ふ

鑑蓮社之刋木の種類考

五山已 名けず

前述荒木豊三郎氏により此の鑑蓮社札についての総括的の研究は満されて居る 編者は少なき手元の参考資料により 前号に記載の如く種類即ち刋木の種類と荒木氏と別に合類し 且つ古きと新しきとの比較研究をなし大より小さき点に至るまで一通り諸氏と共に誌上に於て研究せんとす 編者未だ充分なることを述べ得らるる位置に達せず 日夜研究に 資料蒐集に 或浅学なる頭脳をたゝき浮び出して駄稿を草す 然し今日に至るも自己にさへ満足たるもの草し得ざれば諸兄の御心に添はざる箇所多からんやも知れず 御遠慮なく御叱正あらんことを一重に御願ひ申す。

扨て荒木氏の説の如く此の手替り印の調べは我が楮幣研究家の一日もゆるがせに出来ざることにしてその種類の蒐集も眞に必要なることなながら一藩私札に付いて其れ深く廣く研究せんと欲せば自然に其の札についての手替り印等に付いて研究し 其の札の種類刋木の種類判木の新古 札其の者の使用せられし範囲 及取扱者の 発行者の 発行者の人数 種類を調べ 其の札発行者場所 使用箇所の経済学的考察をなし 其の札に関連したる古事及歴史 民情に其の研究を及ぼし 他藩私札に比較し其の札の善悪。図案 紙質の研究等に及ぼさんか 実に興味自ら起り食ふことも寝

ることも忘るゝは編者の常に體驗する処なり　一藩私札について同好者諸氏(各在住地を特に望む)深く廣く研究せらるれば自然なる大なる發見あることは火を見るよりも明なることなり

我が岡山藩札についても今迄と異り　此宝札　享保初札　享保旧札享保新札の四つに分類せざる可からざるに今迄は三つ即ち此宝札と旧札　新札とありしは未だ其の取り調べの充分ならざりしに依らん

岡山札については後日くわしく述べん

願ふ　同志の人々よ　種類の一つだに　多からんと願ふて日夜齷齪して居るよりも未現存数多き札について深く廣く研究せられんことを願ふ藩札は藩主の財政の特に悪く乱発せられしもの　及私札の研究は最も興味あるものなり

然して本文たる鑑蓮社札　即ち岡内　攝津の鑑蓮社にあらず最も其の中にて現存数多く　使用範囲廣かりし南都鑑蓮社札の中の一匁札に付いてのみ研究せんとす　一匁以下の諸札は此れに順じて御研究ありたし

又此の鑑蓮社の存在時代　或は使用範囲　元史人の遷り変り、取扱者の変遷　亦は此の札に付いての逸話等は其の札發行所附近に在住の先輩諸氏に其の研究を願ひ　我が鳥城猪鼻款上の華として御發表あらんことを乞ふ者也

殺木の種類

前述荒木氏の分類も可ならんも今少し札について研究したらんには三種別とするよりも今述べんとする札種別に分類するにしかず

人此の上充分なる研究して見んか　此れ以上の種類別となるやも知れず　然らば今此處にて言ふ種類別は諸氏の一つの参考資料となり、愈研究積りて此の鑑蓮社の完全なる結果を得らるれば猪鼻界の為め又一個人としの編者の喜び此う上もなきなり

同好の人が札そのものに就りて小さき点まで研究を積めば自然に使用時に於ける　にせ札　を知ることを得　此れ　此の手替り研究者の思付の副産物たる大きなる獲物なり　此の外多くの獲物あれど

男子なる

我れ今　此の札の種類を研究するに当り　何れの類を新とし　何れの本を古と言はず諸代と共に研究上最も見易き方法によりて其の研究の歩を進めて行き最後に其の札の新古　初發行札なるや否やを充分先輩諸代と共に探索決定せんと欲す。

余り小さき部分を此の誌上に於て書き續けんか　其の繁雜此もなく遂に研究上に支障をきたし、何や彼や　さつぱり其の言ふことを知るを得ざるに至り　暗より暗へとさまよふに至るとの編者は全体に渉り共通的に　最も研究に便利なるべき二　三の箇所を擧げて研究をなさんとす。

同好の人にして此の本文よりも寧に細に研究せんとの望みの才あらば編者は喜んで研究を共に致し、ともに共に研究あらんことを

さて今回は次の諸條につき研究せん

銀一匁。　此以手形引替相度可申候。　役可。　南都所貨。所。について

研究せんとす。

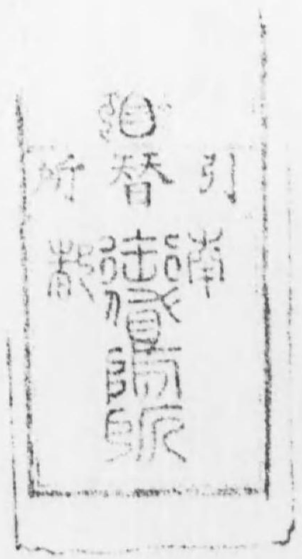
おんこゝろわり

なお号先月早々お取の筆の如
たゞ鑑蓮社れ全部れ種の図
を完全に記載せくものと此引に
此引を重ね其の完成はは
引なしまりしかどもの
もを来ず残念だがら
記載は断念仕りして其
の一部の下部のみりても記
載せんとせしかど清覧の
完全なるもの出来ず残念に
も本紙中止致しいて
遅くれて且つ記載せず汗
顔れも清笑陵に入れ申す
次第であります

武田陵

銀壹匁

銀壹匁



裏

表

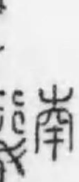
4のうら

4の表

二大区別

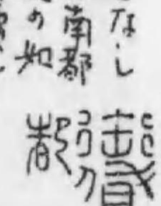
今最も見易き　南都　御貨、所の字体により区別をなし
1と2との二つに分ち　1に於て最も異なる処は南都
二字第一に異なり　貨の字に就ては前述荒木氏の説の如
く1に於ては貝の第五　が貝の字の上部の角にて接触し
2に於てはやゝ下方の貝の字の第三　に接して居るを以て一別し　最後の所の字全く書き方
を異にし1は辰にて2は尺にて区別す　以上の外小さき処に依り区別を求むれば貨カイに於
ても見出して区別し得るなり　然れども本記上に於ては以上の点に於て二大区別をなし他は
同好者の御研究に於て比較研究あらん事を願ふ

南都　1



と

南都　2



1に属するもの五種　2に類するもの四種　合計九種の版木ありしもっか　此れ以上有りしや
も知れず　或は此の九種の中に贋物あるやも知れず
編者も未だ初歩たして　研究中なれば現今に下は以上の九種の版木ありしものとして研究を進
りて行かんとす
然して研究上の便利の為め三面大黒の処を一とし福寿永寿を二とし　銘一匁を三とし其の両
側を四とし　此の手形を以て云々の処を五とし　最下部の役所の処を六とす
又裏面に於ては御霊屋の処をイとし　鑑匠江云々の処をロとし　海老門金々両側をハとし　宝ふ
の三々国家典欽を二とし可否可をホとし　南都貨幣所をヘとして区種について述べんとす

1の壹	飛雲前者異り相口木目あり其大なり松の葉大なり松の根の部太くして組なり松の木目なし	福の字並前者と異なり　金偏同じ　ネと区別する外	銀壹文
1の貳	飛雲前者異り相口木目あり其大なり松の葉大なり松の根の部太くして組なり松の木目なり	福の字前者と異なり　福なり　前者Cとし此れをDとす	銀壹文
1の参	前貳と同じ	同じ	銀壹文
1の四	飛雲前三者と異なる相口なり福金偏きかれ組なり壹と同じきれども大きく組は小なり。木目なくわれ組は大きなり。また組なれども異なる処あり　大黒の口最も小なり　異なる処多し	同じ	銀壹文
1の伍	飛雲四に同じ　四に同じ	四に同じ	四に同じ

2	黒銀	肌の丸味あり　斜ならず　肌とWに注意	
3	銀壹文	銀壹文	銀壹文	同じ
4	銀壹文	銀壹文	銀壹文	走と同じ

隠字	6	5
キ	右側龍の下の24本に キの字あり	字全体縮字なり 此仮手形 此の字連像し手さきのみ小なり 他も多少異なる所あり
キホカ	右側キ 左側に中央にカあり	此仮手形 善通寺いわんか 引小なり
キホ3	右キ ホあり 左に キ ホ のあり	同じ 蓮 斜ならず 印Aなり
キカホ	右側キ たにカホあり	同じ
キカホ	四と同じ	同じ

鑑の字斜にして蓮と離る蓮の支に得有の味あり 社の示 ニ不なり 役所の字体何れも多少の異あり さへす役所の下の九 印に二種あり 此の印をAと定め Bとの殺A のみても用ひ 龍のなりても各種 各々違へり 龍の形にて目に特 象あり

鑑の金金なり 前者は金なり 役所 ハ金なり 示は示不なり 蓮やゝ斜なり 印同じかぞう Bとす

鑑蓮社箭大なり 社の示 不なり 役所木全体類なり 又 役所の又のはね特有のはねなり △なり

その版木 四と全体同じ

前表の如く 裏面 1に属するもの、中に五種のものに分類することを得たるなり、1の大黒天の絵に於ては 龍雲を見て三種に別つを得べく 大黒天の槌を見ては木目の有無に依り二種に別つを得べく 尤も 四、五とは相似たる処あれども 尤は四五よりも多少窓に して 二者の一見して異なる処は 辨財天の髪と鳥居なり 前者は後者に比し鳥居小なり 髪、後者は前者に比し大なり 前者は 後者は 人なり 鳥居も前は完全なるに後者には口なく前者にはあり、其の他此の五種を充分比較して述べんに は筆紙なり

表の銀の字の金偏のはね他の四種に比して異なる尤は 他は なり 又のはね各異なる 注意ありたし、尤の一も同様なり、

隠字 は何を意味するものや我れ知らず

のあるに就いては尚不明にして諸氏の研究を待つ

龍を見るに何れも異なり 図に記せんとすれど充分なること出ず 筆にて述べんとすれど 充分言へず も 現物により て見られん事を

次に2の四種類について研究せんか

6 は1の或に同じ

4 は1の参に同じ

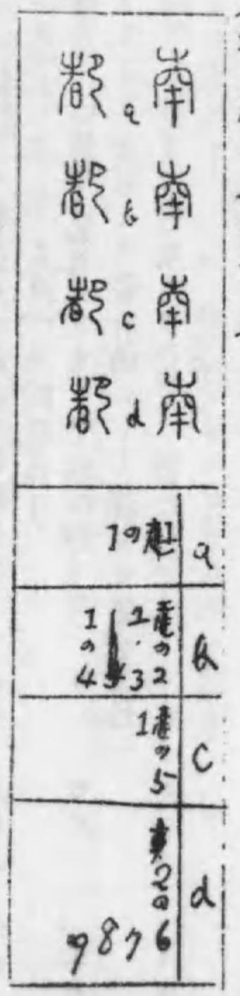
8 は1の参に同じ

9 は1の或に同じ

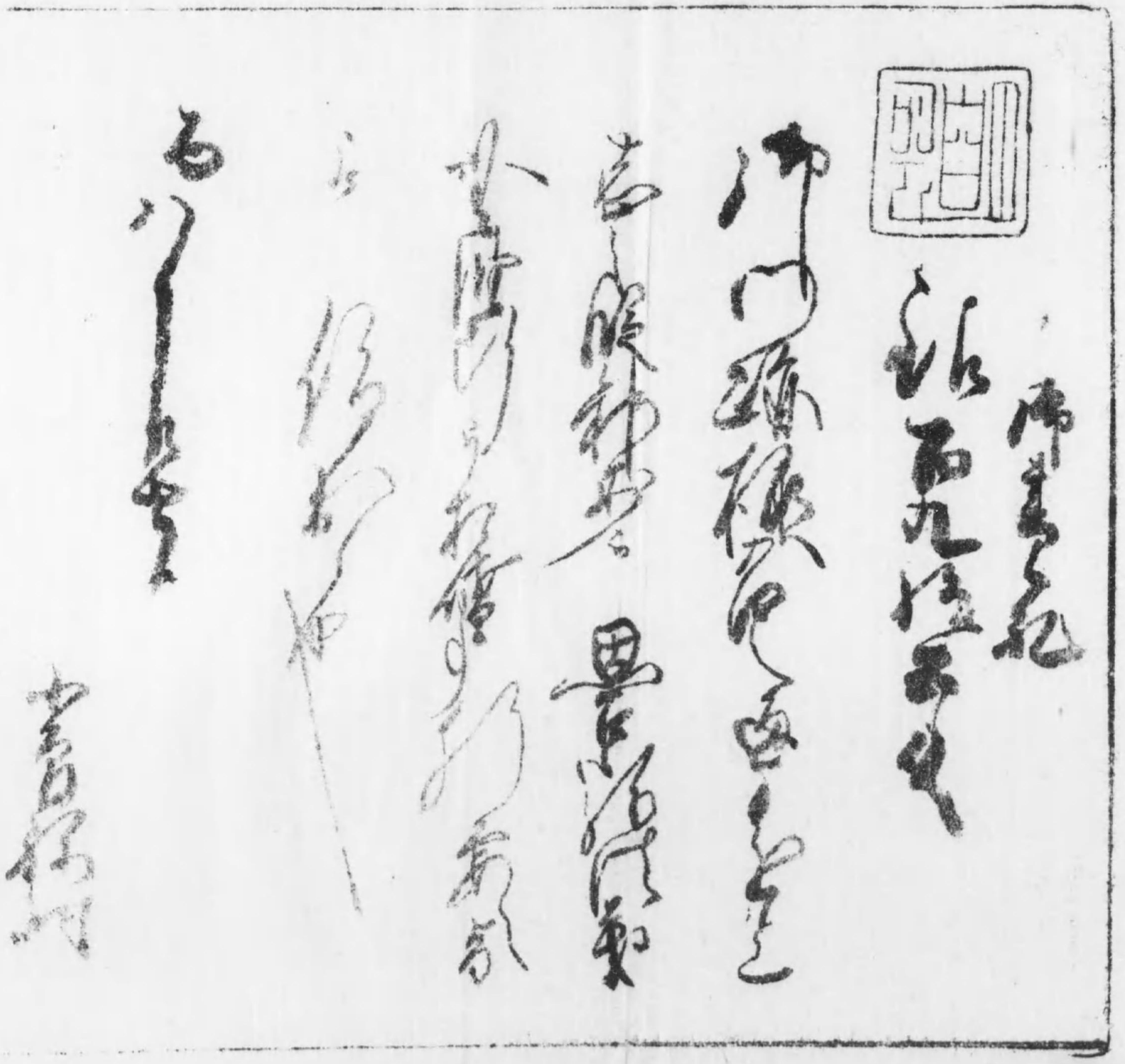
の如き結果を得べく 5、8 は或の変化(裏面)6、7は参の変化なり、

裏面の研究

裏面の御雲屋の字も周囲の唐草様の字も雲も多少の差異あり其の他鐔匠花押程やちほひの模様や漆の肩金沛子形の字形や 固家印鐔や鎬 多少異なりて云ふ可き処あれど暑しても最解り易き南都の字にまりて分類せんにa b c d の四種に分つことを得べくして其の各種の属する処は表の如し



かくの如く分類し来りし処南都の二字は別に後まり押捺せしものやとの疑念を生ぜんも左様なことなく矢張 牧木各々異なりて居るものにして 今迄のことを見れば 9と6は同一にして 7、とるも同一なるものゝ如く察せらるゝ、ものなれど次に研究を加ふ処に依りて此れ等の疑念を一掃し得べく 且つ九種に分類をなす可きものなりとの得心をえいことを得べし、 然して此の九種の中何れの版木を古とし 何れの版木を新とするかは次号にて諸兄姉と共に論究せんとす 且つ新古の別を見んとせば 其れに使用せらるゝ処の押捺の印により判断を下す可からざる立場に至る 故に次号には此の押捺印をも研究せん



せんとす　諸兄姉に於ても充分なる御研究御指導すべらんことを一重に願わなり

2		1		
ほ	に	は	ろ	い
識別記號	識別記號	識別記號	識別記號	識別記號
98	76	5	432	1
特徴 紙のこと。角あり　へ　山形をなす 字全体にのびくして居る大なり			所いと異なる い角あるにろにはなく丸味なり 其他異なり	
		字全体に縮字なり　字形全体に異なる		
	ほに比して所の尺。角あり			
所の尺。丸味あり 貸の行爾にと異なる				

283
102

	表面全体	多所丸印	落字	裏面の南都	裏面の海袋
1	壹	A	キ	a	( )
2	貳	B	ホキカ	b	る
3	參	A	ホキヨ	b	る
4	四	A	カキホ	b	る
5	四	A	クキホ	c	は
6	貳	B	ホキカ	d	に
7	參	A	ホキヨ	d	に
8	參	A	ホキヨ	d	ほ
9	貳	B	ホキカ	d	ほ

紙格的に表にせば前図の如しあらんことを希望いたします

御愛讀者 諸兄姉 未だ不完全なる此の編に就いて

大正拾五年四月十日 印刷納本
大正拾五年四月十五日 發行
非賣品
編輯兼發行者
岡山市下石井三一三
武田鋭二

終